



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市学に対する社会学の貢献
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	昭和 33年 11月 22日。
Issue Date	1958-11-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77332
Type	manuscript
File Information	D008_0133.pdf



白江記録1

NOTE BOOK

MADE BY SUPERFINE PAPER

都市學に對する

社會學より貢獻

33.11.22

II

KA

20

goshen

都市をいさぐる社会をいさぐる
の意匠

一 都市をいさぐる社会をいさぐる

二 社会の中でいさぐる

イ 人同社会は法の基本の構造

ロ 社会の基本をいさぐる

a 同居関係
b 村落
c 都市
d 市民社会

三 ありの儘の現象

イ ありの儘とあるべき様

ロ、実證的の意味、実験の意味

ハ、直接の研究対象

α、現在

七、自分の所属の部会

シ、反復的総合観察

社会科学研究
の一般原理

四、都市社会学の原理に於ける私の
所論

五、~~都市~~の中心問題

六、第一集落社会の概念

七、第二都市の機能

ハ、亦、都市の社会構造
九、亦、都市の生活構造

一〇、私の所論に対する批判の中に
~~批判~~ 答へよ

一、都市学舎と村舎研究学舎

都市学舎も村舎研究学舎も共にこれか

直接関係なし。片は学舎であらう、それは

明らかならうであらう、これに同じであらう。

都市学舎も村舎研究学舎もこれか、

もし行政者めや社会指導者めやの観

念する学舎であらう、何の名称もな

か、^{増え}村舎を学舎とあらう、都市と

村舎を色々の別名から研究するの

果は都市の研究も、^{平和}村舎の研究も

同じである、試みるべきは大いに意義あ

らう。そこで^{平和}研究をとおすから

は如何なる意見も、^{平和}評価をうけ

その評価に聴従す。

それは私に随分甘しい試練であった。

私は此の試練に耐えかねては平らな心で

から、社会生活の立場からの意見を

求められ、席上に座り、お席したるか

あゝ、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

また、社会生活の立場からの意見を求められ、

7
15
5
い

書卷五

位
位
位
位
位

多

芳

42

五十二

七

人

の

二人塚

念

わしはおく

六 社会の中心課題

私は都市社会学には社会学の立場か
う貢献しようとして居る。社会学の立場
と云ふ事を私は次の様に解して居る。
人間社会の基本的構造の究明と云
ふ事が社会学に課せられて居る課題
であると思つて居る。人間社会の基本
的構造の究明には勿論科学の局
面の研究が直接の根拠に考へし得る
ものであるが、人間社会の基本的構
造は、同居関係、^(一)家族、^(二)村落、^(三)都市、^(四)民衆の
^(五)の幾つもの強力な相互の内に

（主として）

言われてゐることは明らかである

から、この四つの框の構造や機能の

間、研究は何れの社会学的研究に

見失はれてはならぬものの様に見え

この四つの框について充分の見通しがない

とどうして社会生活の正しい理解が

あつたようか

社会生活に同じく世の方面からの

研究があるか、これ等の框についての

研究に必要として居るものは社会

以外にはない。他、同じこの框

に對する研究は二つの社会学的期

（附記）

行し
 浮浪史が
 三すよ。
 記号の
 なるべき
 である。

最大の器の
 待して片もあてあ。
 記号を如何にして
 これ等の極に對する研究は如何に
 してあるのみならず、それと究極の
 目標をすすむものである。
 記号は局部的に標本の範圍を研究
 して片が、それ等が記号を如何に研究
 して使役する
 ではないと云ふのはなく、それ等の研究も
 直接に人間の生活の
 基本的な構造の究明を究極に
 具して片のものとして云ふべきである。
 中心の課題が明確でないが、これは、記
 号は百鬼夜行と云ふ、百鬼夜行

22

の不安に見ゆ
それ等の
現況が實際に
なつてゐるは、
さればその
さういふか、
それ等と互
に、不安を
おぼへてゐる
であらう。

私はいま、愛の順として、新保のゆく
理論をいなければ、~~は、~~と、~~先~~先
の研究も同じにしたい。偉いといふ
先において、その順に、~~同~~同
常識的、理論を、~~甘~~甘
その上に立てられ、~~可~~可
が、~~空~~空、~~論~~論、~~に~~に、~~あ~~あ
このものは、~~あ~~あ、~~然~~然、~~い~~い、~~ま~~ま

此等の研究は研究の第一歩からおこなす
物の中にもあるが、はかりつゝあると云い難いものもある。
物事の研究の多くは、その基盤の上に立つて行ない

三、有りの假の訛字

すゝめ

この如き基督教の
社会の理解の
為には

社
屋を
活の
有りの
備に
おいた
り
家
か

は、
有りの優
の地家
の果
の

[illegible]

すよと云ふやうであらう。そのう特異のに種こゝでは特

調子
は
あ
る
。 （？）
と
い
ふ
の
は
な
ら
ず

（は）
社会学の何れの見地より

又自由を張や民を張や解放思想に

七
提
付
水
奴
艸
字
在
意
可
也

和
E.
鐘
海
安
保
重
生
法
度
女
清

の
易
殺
の
於
に
て
流
家
し
た
り
鋪
を
あ
る
機
度
の

支那の司
事の
所
に
在
る
事
を
記
す

いふ
改訂
文庫
新編
文庫

① 偉大な人物は又此種材を絶對的の
ゆゑと認められざる者もあらず。
然るに其も亦い

なり何れも此生活にあ
るものに耽溺して居るの
智の

或いは

と書けの國に於て又其の進歩を
張るは階級的支配と被支配の關係
に於て國家しようとするものなり。

ほるやその力の偏重にも關係する。
平場、偏重、のち多量の

國は、ありのまゝの力の人々との
關係が如何なるかに力があるか
國は、何なるかに力があるか

と行くか、その力の偏重にも關係する。
國は、何なるかに力があるか
國は、何なるかに力があるか

年々その關係を強めようとするは

都市を構成して、人々同國は、何
にあるか、何なるかに力があるか

都市とは何ぞものか村舎とは何

をいかに答へようか ^は都市とは村舎とは

ある基本的社会構造の理解

の上に立つものである

いか、そのためには都市生活の

社会関係のありようの型を説明する

社会的把握が必要である

ル

④ 現在のみが社会の秩序の

可能性をいかに説明する

である。ここに社会が秩序を

維持する原理をいかに説明する

を保持する原理をいかに説明する

保つてあるか。それを知らなければ都市生活

に存する。あるいは社会の型を整理

する。あるいは社会の型を整理

⑤ 都市生活の型を整理

社会構造の型を整理

都市生活の型を整理

社会構造の型を整理

都市生活の型を整理

社会構造の型を整理

都市生活の型を整理

社会構造の型を整理

都市生活の型を整理

社会構造の型を整理

※ 元个学主仁宝
证的丁、有、为

12
は
14
50
の
に
税
仕
の
調
査
所

窓の上に
隠れ線の
足元

兵をかくすはあつた

廣東の形成が地層学的には各點を

不覚と云ふことの
おぼつかない。

加基本的記号構造を完成する

ト
わくのやうな字に
念の合符を

必
要
な
カ
は
、
か
の
如
き
事
は
、
政
を
以
て

文源堂

厂史的
研究
高下
优劣
的有
不一
部

の
石
定
正
昌
子
也

時子 瑞 廣 仁 堂

その後の経験的知識

七
總
令
知
12
年
家
世
い
い
充
分
な
申
様

の存す
 此の
 知り
 九牛

の
一
先
下
し
下
お
け
は
い
中
家
に
お
き
ま
さ
か
そ
こ
で

現時の
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

井上清徳に
 38とありうが、
 見はれぬ。

教育の発展は、
 社会の発展に
 必要である。

[illegible]

なす 32 と 2 の 社 会 の 1 つ 面 面

是
 予
 は改めし
 新うしく
 うきし
 けい
 はた
 め

幾竹か

作 30 戸
 一の持家の
 分りあ
 一
 試み結

乙未年正月一日

名葉も甚だしい。✱

2

C.

次に社会関係は意味の世界に在り、
ある事柄であり、が、意味は共通の世界は
所有する社会毎に特異に
国民社会を異にする。毎々著しく異なる

居るから、研究者は自分の所属する社会

下の社会に研究の足場をおく。これは

誤り。正しい意味の理解はその意味

をその社会でなければならぬ。場合が多い

人同様に生活の基本の構造の認識を

窮極の理として、その社会には社会

関係のありやうは、~~場~~場をその社会の中の

修むべきもの。が、その社会が

元の文化性を帯びる。これは同一の

もしくは同様の現象が何人によ

る現象

得。

されど、又は緩急も又重複し、秩序
しなやかでなければならぬ。自然秩序
における緩急は秩序を乱しうる。秩序
を規定するものであるが、秩序をいかに
のうちに秩序は秩序を乱しうる。秩序を
乱すのである。友、^{そこには}多くの人が、^{同時に又は}何れも、
返して秩序は秩序を乱しうる。秩序を
乱すのである。故に秩序をとり、秩序を
は可成り類型に外ならぬ。^{易作の}秩序は
の秩序の秩序の中より漸次高次の類
型^はを^は知い、如何なる類型の秩序を
知るか、^{その}秩序の秩序の秩序を形成し

と片々かを定家めんとするものである。この
類型の概念はあく人の可行情式
の概念に近いたともあざけれり、

類型の概念抽象化中（^{抽象化}）
社会生活の深見を思ふまゝなとは決し

と考へて片なり。社会生活の窮極の存在
深見は人同士の基本的構造の圓明
であつて、その為の異作のありや人
同同士の類型を抽象化し整理し
て行くものである。

都市は人同士の基本的
構造中の重要な一領域を成

して居るのである、その社会的統一
が如何に構成されて居るかの究明は
都市の如何なるものなるかに課され
こゝに最窮極の課がある、又社会
を以ての科よりもはるかに課され
たもの、究極に於てあると確信する。

(五)

四、拙著「都市社会を考察」における
私の所論

拙著「都市社会を考察」は、
所論の中次の四つのは、私の立論の
支拂をなす所なり。現論として、それは全
く社会学的なものの研究地であらうと云ふ
が、ある。

私の考へが、平しく理解されるに
こゝにその要旨を述べよう。それは無
い所ある。又、この拙著において、
述べて居るもの、また、これに補足した
いたいと思ふところがある。

才一可也此乃其の概を

先づ才一に私は萬葉記等の概を
に到達して居る。私の研究の起るは
現在の日本文に於ける皇下の社会的
実の概に始まる。私は萬葉
記の概を指定したの^も現在の日
本文に於ける^{それから}概を
の道程を^{その概を}研究する中に到達した
ものであ^る。此^の概^をへか^ら丁史^の研究
の結果や地理^の研究の結果も
も^も得^るて居る。其^の概^をは
其^の概^をへか^ら丁史^の研究^の結果も
得^る。其^の概^をへか^ら丁史^の研究^の結果も

おやう

竹崎の役をなすもの
直接には

迎中研究者としての私は、余り同じくは
ない。私は山村落より都市へ移る者である
と云ふ。山村落より都市へ移る者は共通の
基本的な機能をもつてゐる。山村落に
を破滅してより満ちた。山村落に
何かを加へる。より加へた。都市
的に向ふことも、他向を見せつて、その
何かで決断しては何かか、甘んじした
ところである。北海道の昔々から
研究をして、其にその何かは、社会
的交流の場としての機能が、なす
に思ひあつた。私が、都市的機能
を知りぬ人との、同様の何かか、山村落の死をも
都市の死にも、おぼしむる。都市の死をも、
山村落の死にも、おぼしむる。

一
子
↓
た
の
た

卷五

の
能

(毛根撥つての爲に)

生 野 山 阿 蘇 山 分 折 五 初 め か ら や う
 た け ら 休 眠 一 な ら ず

子と
土
た。
一般
的
生
業
と
い
ふ

とよは皆社員の交流の場である

す
社
多
の職、
同
たあさるがしん
たふりな

水野竹堂の集に
不慮に

市上
五
二
三
は

貯
金
常
積
の
心
を
所

考へてあゝか、その物理的生葉は比力

北米交流の
活動の中心として
なる

この文は一の字が
~~一~~の字に誤りあり。あつた

日本の交流 対岸の山と海

都市に人々が集中して来たりするも
 都市の人々が盛んに往來するところでも
 故に交通の便の増大が加はる一
 都市に高層の文化が現れ、高層の生活
 生活の文化が現れ、高層の生活
 都市に高層の文化が現れ、高層の生活
 都市に高層の文化が現れ、高層の生活

決めるべきところに
 が都市の様子の性格は、
 次に都市は、その如く村に比して、
 の都市は、村に比して、
 市場とかサービスマンとか、
 ように、村に比して、
 村の周囲に、その如く、
 そこに、村に比して、
 村落と都市を共に、
 は、両者に共通の、
 村落に、村に比して、
 異なるところ、
 村落も都市も共に、

又その他の共同災害に對して共同
防衛の活動が必要であることは今
の村落にも昔の時代の都市にも足ら
ないことは明かである。

一、共同災害に對する共同防衛の機能

二、生活協力の機能である。すなわち

村落の共同生活の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

共同防衛の機能である。すなわち

大(1) 都市の色々の施設は之れを常備
的・同的・符号的に整備して居る大
のゆゑに之れ

不伴

[illegible]

大都會の一の巨大

東洋の第一の権威は其の国民が種々の

予とて
 枯葉は
 興味の
 感懐的

生活

又打算作な

的な交易の制度によつて協力の秩序が

維持されて居る。この同じには容易に説明

すには面倒すぎる。同じを言へば居るので

今こゝで充分に説明する事は出来たが、

都市に居て居る者は、^{（うまゝ）}相互の者も

見えず知らずの者の他のウトン屋に飛込んで

いくらかの金錢をかせれば腕かいウトン屋

水知らずのウトン屋でまへられも給ふに

対し、相手の反対給付が与へられ、それは当然

である。思ひ込んで居る我々には、^{（の頭）}ウトン屋が

うまゝと居る様子をたれ協力者たとは解し

難い。けれども生活の協力は果て愛にす

ちん威嚇的な協力ではな一、^{（の）}打算

各自の為に

✓

密西的工業中心之一地力は合衆

打撃、新採取手段の人の同的

な形をいふにそつて、
け、と、そ、わ

カ、協
力い
るに
はな
りな
い。
困
るを
要

りそ水によつて埒力を失ふを以て埒力不足と云ふ

的
お
ス
的
な
感
情
的
な
擲
力
と
よ
う
に
照

てある。持主で何人か、家々々の間に

因 ねえ の 弟 が ほろま わさ れる よう に な っ ぽう

さ、ぼりした、
おや、的鉄、
すの、了、かあ。

その水
の
成
す
は
合
理
的
交
易
に
よ
る
場
合

以上の都市の擲力は、愛するのさな

現世をいつくすには、
人々の協力の力

打撃も、
その果ては、
生活の中心となるべきもの

の生活に、
その果ては、
他の果ては、

に、
その果ては、
他の果ては、

は、
その果ては、
他の果ては、

は、
その果ては、
他の果ては、

生活する、
その果ては、
他の果ては、

市は、
その果ては、
他の果ては、

によ、
その果ては、
他の果ては、

あ、
その果ては、
他の果ては、

は、
その果ては、
他の果ては、

さ、
その果ては、
他の果ては、

他に簡紙化してゐるが、要するに、
質は都市に於ける柳の、
それ程多量に産出するもの
あるかへ

都市の機能

都市は村落と同様に集落地帯としての
性格をもち、その上に社会的
交流都市としての機能をもつた。

都市をいへば都市といふものはこの

社会的交流都市としての機能である。

社会的交流都市として都市が作用し

て居るのは社会的交流都市の役を

果たす、この生活がそこに集まる

この人からなる。社会的交流の役を

演ずる生活はこれを目的として生活者

は集積して居るのではなく、生かすための

生活活動、即ち結果において交流都市の

以上 16p (14)

○民衆のための社会的

役を学んで居るまで
結果となつて居るやう

新は今日の文化の隘路ではあるが、
的交差の力もまた、男をたしむるもの
のは「口境」即ち社会の境界域であらうといふ
と、口境の線の上で一切の法的文
法の流転は一登ストップして止む。

□の中尖がうの一切の指令はさへはての
 一農家をたも同達、たぐく雇いへるが、
 □境を越えしは完全なる停止す。
 の流れし教育の指導方針も生活文化
 も映るも政府の圧力も保護も□境の
 録にて停止す。新米は比□民社子

の
地域の
足は
充分
に
認め
られ
る

海邦に松崎は紅心な安いはれと

境の高は、障子に紅屋の上は

都市は、子供の遊び場の
多の場所へ
なるとこ

ろで あかき 都 邦 友 の もの ^い ^ち ^わ ^る 社 会 的 変 化

階級と、
～
戸口と、
（木）
ハ
時
その
社会的

突設
手
空
上
口
民
社
内
に
お
け
る

此厚之友在焉

口民は本来政治

により、
 其基礎を
 与へられ
 社会

である。□家の主権が統治して居る領土

内の社会である。そこでは何よりも統

治とあり、カオ一義の支配である。

□家の統治の都合上□家の中心は

何れの地方にあるところといふ首都が

設置される間中、この首都より

□の領土内、どんな小さな一軒家

にも、□の統治が及ぶ保障の思慮を

おつと昔に義務を要する。□家の

統治は断え同なく、金に民を監視す

必要である。あらゆる情報を□の隅々か

くたえず受け取り、再び又あらゆる階層

統治上の

に對しては、必要なる處分の決定があらうと来る
る為には、^{時々は}口の中へかうもする兵力が遣はされ得
る為には、口内の要所毎に不斷にその
^{施設}
の設けがゆゑとなり。又かくの如き地方
的要所の統治を中々毎に又何故もの
支所や出張所が必らずとされる。
統治の場の中に、^{のおおむね行政区域}首都とその下屬
および所在地、その中の村市町村がある
所在地がある。それは、これも認めるところであ
らう。これ等の各點間の統治施設を画して
口家のどの一軒か、^京それなり程合はす、
あげられ、首都に集まる。口民の上の人
^{の中央政府}
^{められる。}

